

# 【シンガポール】コロナ禍におけるシンガポールの 5 歳児: 幼児の 24 時間活動指針から見る、24 時間行動、デジタルメディアの活用、人間関係の質

著者: シレーン・リム\*、ジアヤオ・リー\*、ランドルフ・タン\*、クリスティン・チェン\*\*

所属: \* シンガポール社会科学大学

\*\* シンガポール幼児教育者学会(AECES)

## はじめに - シンガポールについて

シンガポールは人口 545 万人の都市国家であり、そのうち 399 万人は長期居住者(国民および永住者)である。失業率は比較的 low 水準にあり、2021 年 12 月末現在で 3.5%となっている(シンガポール人材開発省、2022)。幼児死亡率も出生 1,000 人当たり 1.8 人と低水準にあるが、合計特殊出生率(1 人の女性が生涯に産む子どもの数)は過去 10 年間で 1.12 人までに落ち込んでいる(シンガポール統計局、2021a)。平均世帯人員は 3.22 人で、居住者の 78.7%が公的住宅(住宅開発庁が供給する公共住宅:HDB 住宅とも呼ばれる)に住んでおり、持ち家率も 87.9%と高い(シンガポール統計局、2021b)。

歴史的にみると、シンガポールは 1298~1299 年に最初の入植が行われ、5 人の古代シンガプーラ王によって統治された。海洋航路が自然に交差するマレー半島の先端に位置するこの都市は、アラブのダウ船、ブギス族のスクナー船、中国のジャンク船、ポルトガルの船など、様々な船舶が往来する交易拠点として栄えた。1800 年代になると、シンガポールは大英帝国の植民地となり、イギリス東インド会社のために当地域の重要な交易拠点としての役割を担った。シンガポールの活発な経済活動を魅力と捉え、中国南部、南インド、スリランカなど、遠方の国から多くの富裕商人や仕事を求める労働者が入植し、先住民族のマレー人や東南アジアに住むアラブ系移民との共生社会が出現した。

シンガポールは 1965 年に共和国となったが、それ以降も英語を商用言語とする多文化、多言語、多宗教、多民族の社会であり続けた。居住者の内訳は、中国系(74.2%)、マレー系(13.7%)、インド系(8.7%)となっている(シンガポール統計局、2021b)。シンガポールは 720 平方キロメートルをわずかに超える国土に、高層ビルが林立する都市景観を有し、製造業とサービス業を経済基盤としている。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが続くなか、シンガポール政府は 2021 年 4 月 7 日から 6 月 1 日まで、全国的なロックダウン(感染封じ込め政策:サーキット・ブレーカーと呼ばれる)を実施した。それ以外でも、新型コロナ接触者の追跡、外出時のマスク着用義務(幼稚園児/保育園児さえも対象)、感染が発生した職場/学校の断続的および一時的な閉鎖、国境閉鎖、集会の人数制限など、厳重な安全管理対策が講じられた。全般的に、大半の保育園/幼稚園や学校は運営を続行し、サーキット・ブレーカー措置が終了した後は、(特に小学校や中・高等学校で)オンライン授業/保育と登校/登園の組み合わせによる授業が行われた。

## 研究の目的

このレポートは、子どものウェル・ビーイングに関する多国間研究の一環として実施した調査の結果を報告するものである。本研究は、CRN アジア子ども学研究ネットワーク(CRNA)の主導によるもので、アジア 8 カ国が参加している。本研究の目的は、長期にわたるパンデミックの状況下、異なる環境における母親と子どもの状況に関するデータを速やかに収集し、専門家同士で対策を話し合う機会を設けることである。

このレポートでは、世界各国で学校閉鎖や行動制限措置が実施されたコロナ禍において、以下の問いへの答えを得ることを焦点としている。

- a) 本調査の対象である子どもたちは、シンガポール政府による「幼児のための 24 時間活動ガイドライン(Singapore Integrated 24-Hour Activity Guidelines for Early Childhood)」の基準をどの程度まで満たしているか？ 子どもたちの 24 時間の活動に影響を及ぼす主な要因は何か？
- b) 母親たちは子どものデジタルメディア活用についてどう考え、関与しているか？
- c) コロナ禍における子どもたちのハピネスやもともと親しい人たちとの関係性の質はどのようなものであったか？

## 調査方法

本研究では、2021年9月中旬から11月中旬の間に、便宜的抽出法によって選んだ母親サンプルに対してアンケート調査を行った。まず、シンガポール幼児教育者学会(AECES)を介して現地の保育園や幼稚園に連絡し、母親たちの参加を募った。次に、紙媒体のアンケート用紙を保育園や幼稚園に送付し、母親たちが子どもを送迎する時に記入してもらった。新型コロナウイルスの感染者が発生して断続的に閉鎖した保育園／幼稚園に関しては、オンラインでアンケートを実施し、26人の母親たちに回答してもらった。

アンケート調査は英語で行った。質問の内容は、コロナに関わる状況、母親の基礎情報(世帯人数、雇用状況、学歴、世帯収入)、子どもの基礎情報(年齢、性別、出生順位、兄弟姉妹の数)、育児サポート、家事の分担、子育て観、子どもの活動、友達の数、睡眠時間、スクリーンタイム、親の関与などである。評価には、a) 児童・青少年のレジリンス尺度(CYRM-R)(レジリエンス研究所、2018)と、b) 児童・青少年のQOL測定のためのKINDL-R(Bullinger, Mackensen, & Kirchberger, 1994)という2つの標準尺度を用いた。また、日本で作成された調査項目である「親が子育てで力を入れていること」の翻訳版も盛り込まれている。

このレポートでは、コロナ禍における子どもの24時間活動、デジタルメディアの活用、近しい人たちとの関係性に焦点を当てている。

データの分析にはSPSS(ver. 26.0)を使用し、分析を行う前に全ての変数の分布、外れ値、欠損データをチェックした。回答者のデモグラフィックデータおよび変数については記述統計を用いた。独立変数(母親の育児に対する自信、養育態度、子どものスクリーンタイムに対する考え、睡眠の質、子育てで力を入れていること等)の相関関係を調べる際には相関分析を用いた。

## サンプル

アンケート調査は、5歳児の母親たちから任意に抽出した便宜的なサンプル群に対して行った。サンプル数は合計136人、調査対象児は69人の男子と67人の女子で構成される。回答者の大半(81%)は常勤職をもち、保育園／幼稚園に通っていない5歳児をもつ母親は136人のうち1人のみであった。シンガポールでは、幼児教育が義務付けられていない

のにもかかわらず、保育園／幼稚園に通わせる比率が高いことが全国的な傾向となっている。また、回答者の 60%は 4 年制大学を卒業しており、政府の 2020 年人口調査で報告されているよりも比較的高い学歴の母親が多い(シンガポール統計局、2021)。

## 調査結果

### 概要

アンケート調査を実施している間、コロナ禍による全国的なロックダウンはなかったが、母親たちの 47%は感染拡大について非常に不安を感じていると答えていた。また、母親たちの 94%はワクチン接種を受けており、48%がコロナ禍における国・地域の感染封じ込め施策に満足していた。

母親たちの 15%がコロナ禍にもかかわらず世帯収入が増えたと答えている一方、28%が減少、34.6%が変化なしと答えている。保育園／幼稚園に通っていない 5 歳児がいるのは母親たちのうち 1 人のみであった。保育園／幼稚園が閉鎖されている間、母親たちが育児の助けを借りた相手として、22%がベビーシッターや家政婦、31%が祖父母／親戚、32%が配偶者／パートナーと答えている。

以下のセクションでは、子どもの全般的な行動パターン(睡眠時間、スクリーンタイムの座位行動、および身体活動)、デジタルメディアの活用と母親の関わり、調査時における子どもの周囲の人々との関係性の質を分析した結果を報告する。

### [A] 子どもの 24 時間行動パターン

本セクションでは、子どもの睡眠時間、スクリーンタイムの座位行動、屋内／屋外で自由に遊ぶ時間に関する結果を報告し、類似の研究の結果と比較する。世界保健機構(WHO)は、朝から夜までの子どもの総合的な身体活動(つまり運動)、スクリーンタイムの座位行動、および睡眠時間に重点を置いた 24 時間の行動指針を発表している。

シンガポール政府は 2022 年 1 月、7 歳未満の子どもの対象とした 24 時間の活動ガイドラインを公表した(CPCHS & AMS, 2022)。表 1 は、このガイドラインに基づく調査結果をまとめたものである。

表 1:睡眠時間、座位行動、身体活動の調査結果

	シンガポール政府の推奨	調査結果
睡眠時間	3～5 歳児:10～13 時間 6 歳児:9～11 時間	63.1%が睡眠 10 時間未満(その半分が 9 時間未満)
スクリーンタイムの座位行動	1 日当たり 60 分以内	調査対象児は1日当たり平均約 140 分をデジタル機器の使用に費やしており、そのうちの約半分をテレビ/DVD の視聴に費やしていた。
身体活動	何らかの運動を一日当たり最低 180 分(毎日屋外で遊ぶことを推奨)	調査対象児は放課後に平均約 47 分を屋外の自由な遊びに費やしており、平均約 128 分を屋内の自由な遊びに費やしていた。  全体的に、子どもたちが自由に遊ぶ時間(運動を含む)は、推奨されている 180 分を下回っている。  ただし、屋内/屋外の自由な遊びが激しい運動を伴うものであったかどうかは不明。

## A1. 睡眠時間

子どもの睡眠時間に関しては、母親たちの 63.1% (n=86) が 10 時間未満、そのうち半数 (n=46) が 9 時間未満と答えている。これは、シンガポール政府の「24 時間行動ガイドライン」(2022)で 3～5 歳児に推奨している一日当たりの睡眠 10～13 時間を下回っている。

そこで、子どもの睡眠時間と、母親の育児に対する自信(「自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる」の質問に対する回答)との間に何らかの関連性があるかどうかを調べてみた。その結果、子どもの睡眠時間は親の不安感の度合いによって異なることが明らかになった。強い不安感(「とてもあてはまる」または「まああてはまる」の回答)を示す親の場合、子どもの一日当たりの睡眠が 8 時間未満となっている比率が高く(「とてもあてはまる」で 24.1%、「まああてはまる」で 18.9%)、10 時間以上の睡眠を確保している子どもは全体の約 27%を占めているのみである。一方、あまり不安に感じていない(「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」の回答)母親の場合、子どもの一日当たりの睡眠が 10 時間以上で、「24 時間行動ガイドライン」の基準を満たしている比率が比較的高い(「あまりあてはまらない」で 54.5%、「まったくあてはまらない」で 46.2%) (図1を参照)。

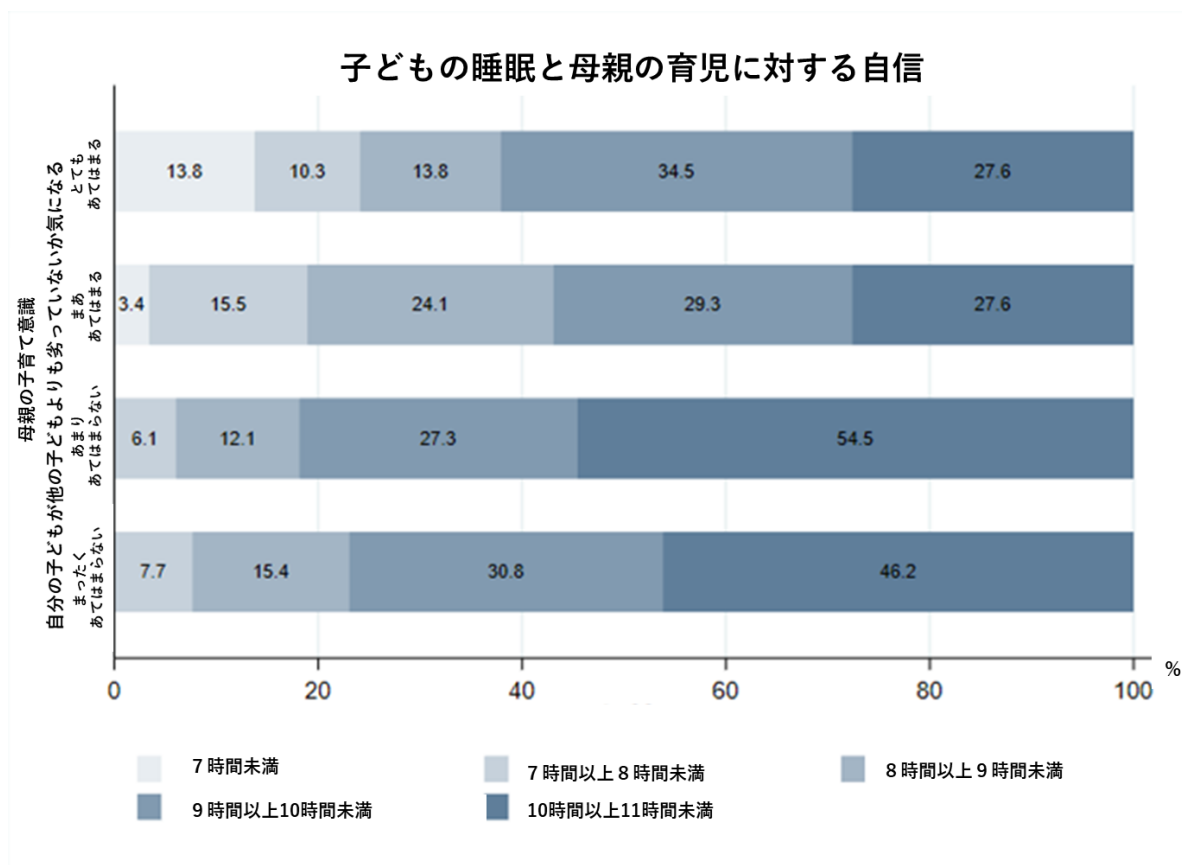


図 1: 子どもの睡眠と母親の育児に対する自信

## A2. スクリーンタイムの座位行動

シンガポールでは、子どもが携帯電話、タブレット、コンピューター、テレビなどのデジタル機器を使うことは当たり前の事として考えられている。シンガポールのコホート調査を実施した研究者 Bernardらは、シンガポール人の91%がスマートフォン、41%がタブレット、60%が3種類以上のデジタル機器を所有していると報告している(Bernard et al., 2017)。

本調査では、母親の13%が子どもに一人で自由にデジタル機器を使用することを許可している一方で、29%が自由な使用を禁じていることがわかった。また、19%が保育園／幼稚園の授業や習い事を頻繁にオンラインで受けていると回答している。これは世界各地で見られる傾向であり、明らかにコロナ禍による影響だと思われる。

さらに、子どもたちは1日当たり平均約140分をデジタル機器の使用に費やし、その大半をテレビ/DVDの視聴に費やしている(平均=69.11、標準偏差=56.81)ことがわかった。ただ

し、調査対象児の 5% (n=7) はデジタル機器に全く時間をかけず、一方で、約 13% (n=17) が毎日 300 分以上も費やしていることにも留意されたい。

シンガポール政府のガイドラインによると、7 歳未満の子どもの一日当たりの座位行動は 60 分以内とすることが推奨されている。しかし、本調査の対象である子どもたちのデジタル機器の平均使用時間は、この推奨値の 2 倍以上となっている(表 2)。また、1 標本 t 検定を行った結果、サンプルの平均値(137.33 分)と、推奨される「一日当たり 60 分」との間には有意な差異( $p<.001$ )が確認された。

表 2: 子どものデジタル機器の使用時間(分)

	サンプル数	平均(標準偏差)	最短	最長
テレビ/DVD の視聴時間(分)	135	69.11 (56.81)	0	240
スマホの使用時間(分)	135	31.56(46.12)	0	240
タブレットの使用時間(分)	135	36.67 (51.53)	0	240
デジタル機器の合計使用時間(分)	135	137.33 (115.11)	0	540

子どもの座位行動と、母親の育児に対する自信(「自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる」の質問に対する回答)との間に何らかの関連性があるかどうかを調べてみた結果、正の相関関係が確認された。強い不安感(「まああてはまる」または「とてもあてはまる」の回答)を示す親の場合、4時間以上テレビ/DVD を視聴しているかタブレットやスマートフォンを使用している子どもの比率が高いことがわかった(「まああてはまる」で 27.6%、「とてもあてはまる」で 51.7%) (図 2)。

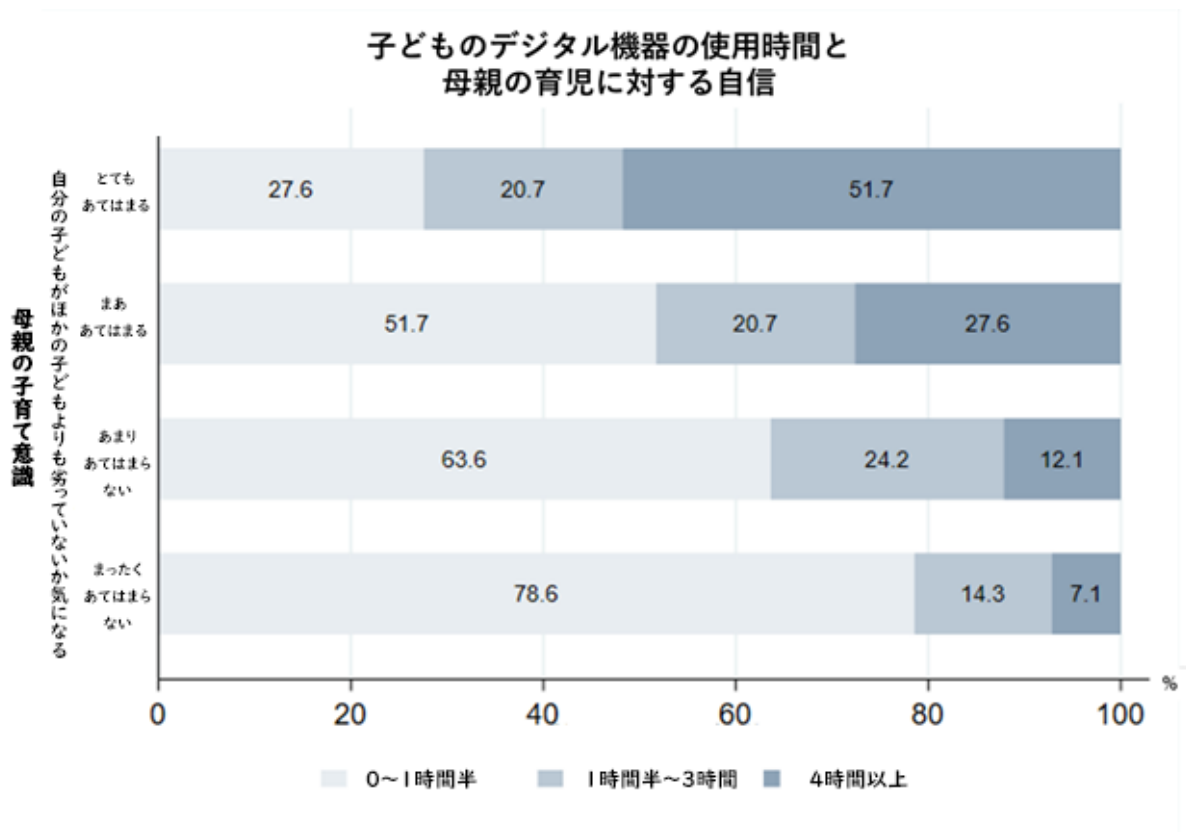


図 2: 子どものデジタル機器の使用時間と母親の育児に対する自信

### A3. 身体活動

調査の結果、子どもたちはデジタル機器を使用する時間に比べ、屋内／屋外の遊びや家庭学習など、デジタル機器を使用しない活動の方に長い時間を費やしているように見受けられる(表3を参照)。ただし、この結果には、園で屋外の遊びをしている時間に関するデータが含まれておらず、また、本調査のアンケートには、毎日屋外で遊ぶ時間のうち、穏やかな運動や激しい運動に費やす時間について問う質問が含まれていない。

とはいえ、子どもたちが放課後に屋外で自由に遊ぶ時間が短いことにも留意する必要がある(平均=47.11、標準偏差=47.86)。また、コロナ禍にある子どもたちは、地域の活動やイベントに参加する頻度よりも(平均=1.53、標準偏差=.81)、オンラインの習い事に取り組む頻度のほうが高い傾向にある(平均=2.6、標準偏差=1.34)。

母親たちは子どもが様々な活動に費やす時間にある程度の変化があったことを認めており、64%はコロナ禍によって子どもが屋外で自由に遊ぶ時間(保育園／幼稚園で過ごす時



間を除く)が減ったと答えている。また、55.1%がコロナ禍によって屋内で遊ぶ時間、54.4%がデジタル機器を使用する時間が増えたと答えている。(表3を参照)。

表3:コロナ禍前後での活動時間の変化

	屋外で自由に遊ぶ時間		屋内で自由に遊ぶ時間		デジタル機器の使用時間	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
増えた	15	11.0	75	<b>55.1</b>	74	<b>54.4</b>
変わらない	32	23.5	45	33.1	53	39.0
減った	88	<b>64.7</b>	15	11.0	8	5.9
無回答	1	.7	1	.7	1	.7
回答者数	136	100	136	100	136	100

### [B] 子どものデジタル機器の使用と親のかかわり

母親たちの過半数が子どものデジタル機器の使用が増えたことに気づいている一方で、約半数が子どものデジタルメディア活用に対する姿勢を変えておらず(n=58)、娯楽や勉強のためのデジタルメディア活用に抵抗を感じていない(n=66)と答えている。

表4は、子どもの日常生活でデジタル機器を使用する目的をまとめたものである。アンケートにはデジタル機器を使用する目的について17項目の質問を設けた。最も多かった回答は「音楽を聴く」(平均=4.13、標準偏差=1.08)(表4を参照)で、最も少なかった回答は「ニュースを見る」(平均=2.04、標準偏差=1.13)であった。その他に人気の高い用途には、「お絵描きをする(塗り絵を含む)」(平均=3.96、標準偏差=1.32)、「動画を視聴する」(平均=3.87、標準偏差=1.08)、「身体を動かせるようなプログラムを楽しむ」(平均=3.84、標準偏差=1.32)などがあった。

表 4: 子どもの日常生活でデジタル機器を使用する目的

	n 数	最少	最多	平均(標準偏差)
動画を視聴する	135	1	5	3.87(1.08)
写真を撮影する	135	1	5	3.33(1.10)
文字や数遊びをする	136	1	5	3.63(1.27)
本・絵本を読む(電子書籍含む)	136	1	5	3.65(1.37)
外国語学習を楽しむ	135	1	5	2.66(1.33)
お絵描きをする(塗り絵を含む)	135	1	5	3.96(1.32)
音楽を聴く	136	1	5	<b>4.13</b> (1.08)
身体を動かせるようなプログラムを楽しむ	136	1	5	3.84(1.31)
ゲームをする	135	1	5	3.76(1.38)
通話やメール、SNSをする	136	1	5	2.30(1.16)
ニュースを見る	136	1	5	2.04(1.13)
情報を検索する(勉強を含む)	136	1	5	2.17(1.21)
園や学校の宿題をする	134	1	5	3.08(1.48)
園や学校の宿題以外の勉強をする	136	1	5	3.21(1.43)
オンライン授業を受ける(園、学校、習い事を含む)	136	1	5	3.29(1.30)
園、学校や習い事、塾等から配信されるプログラムを視聴する	136	1	5	3.04(1.22)
テレビ電話などの遠隔通話をする	136	1	5	3.04(1.37)

表 5 は、子どものデジタルメディア活用時の保護者のかかわりについてまとめたものである。母親たちの多くは「子どもが一人で自由に使用・視聴する」ことを許可せず(平均=2.76、標準偏差=1.02)、「子どもが使用・視聴している様子を気にかけて」おり(平均=3.43、標準偏差=.65)、「子どもが難しいことに取り組めるよう支援」している(平均=3.43、標準偏差=.64)傾向にある。本調査の結果から、母親たちは概して子どものデジタルメディア活用についてしっかりと認識していることがわかった。

表 5: 子どものデジタルメディア活用時の母親のかかわり

	n 数	最少	最多	平均 (標準偏差)
子どもが一人で自由に使用・視聴する	135	1	4	2.76(1.02)
子どもが使用・視聴するものを親が選ぶ	136	1	4	3.24(.90)
子どもが使用・視聴している様子を気にかける	136	1	4	3.43(.65)
子どもが使用・視聴している内容に即して話しかける	136	1	4	3.33(.70)
子どもと一緒に使用・視聴する	136	1	4	3.10(.76)
使用・視聴時間を決めるよう声をかける	136	1	4	3.37(.72)
知らないことが出てきた時に一緒に調べる	135	1	4	3.12(.80)
子どもが難しいことに取り組めるよう支援する	135	1	4	3.43(.64)

次に、子どものデジタルメディア活用時の母親のかかわりによって子どものスクリーンタイムを予測するために、単回帰分析(一元配置分散分析)を行った。その結果、有意な回帰方程式が求められた $[F(8,124) = 8.804, p < .001]$ 。従って、子どものデジタルメディア活用時の母親のかかわりと子どものスクリーンタイムとの間に負の関係があり、「子どもが一人で自由に使用・視聴する」ことがスクリーンタイムを増やすとは言えないことがわかった。予測される子どものスクリーンタイムは $-71.518 (\beta = -.63, p < .001)$ であり、「子どもが使用・視聴している内容に即して話しかける」ことと、毎日の子どものスクリーンタイムが増えることには僅かな関係が見られた $(\beta = .19, p < .05)$ 。

### [C] 子どものハピネスと人間関係の質

次に、子どもたちが親密で安定した人間関係を維持しているか、また、コロナ禍においても楽しく暮らしているかどうかを調べてみた。KINDL-R 調査項目の一部から得た記述データによると、母親たちの 93%以上(n= 127/136)が子どもは「たいてい/いつも家族とうまくいっている」と考えており、また、ほぼ同じ比率の母親たち(n= 125)が子どもは「家で気持ちよく過ごしている」と答えている。さらに、母親たちの約 90%が子どもは「たいてい/いつも元気いっぱいと感じている」、93.3%が「楽しそうによく笑っている」と答えている。保育園/幼稚

園に関しては、大半の子ども(n=124)が「たいてい／いつも園生活を楽しんで」おり、ほぼ同数(n=117)が「たいてい／いつも園に行くのを楽しみにしている」ことが確認された。遊びの状況に関しては、母親たちの回答によると、子どもの遊び相手は多い順から「母親」(82%、n=112)、「兄弟姉妹」(n=97)、「学校の友達」(n=82)、「祖父母」(n=50)、「自分ひとりで」(n=47)、「その他」(n=28)であった。こうした結果から、子どもが良好な親子関係やきょうだい関係を維持しており、そのことがコロナ禍という逆境においても重要な精神的支えになっていることが伺われる。また、5歳という若い年齢を考えてみても、家族との密接なつながりや母親との安定した親子関係は子どものハピネスにとって重要な要因であろう。

## 考察

全体的にみて、調査対象の母親たちとその5歳児はコロナ禍によって過度の悪影響を受けてはいないように見受けられる。調査の結果、子どもたちが園生活を楽しんでいることがわかったが、これは親密で安定した家族関係が大きな要因であると思われる。ただし、母親たちは今後も、子どもが必要とする睡眠時間や運動を十分に確保し、座位行動の時間を減らすことに注意していく必要がある。

本調査の結果、子どもたちの約3分2がシンガポール政府の「24度時間の行動指針」(CPCHS & AMS, 2022)で推奨されている10時間の睡眠を達成していないことが確認された。この結果は、GUSTOコホート調査の研究者Chenらによる5.5歳児(N = 547)を対象とした研究(Chen et al., 2019)の結果とも合致している。母親の育児に対する自信(「自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる」)と子どもの睡眠時間には正の相関関係が見られた。これを深く掘り下げて理解するためのデータが手元にないものの、子どもの睡眠の質と行動は、母親との密接な関係(Bell & Belsky, 2008)、養育スタイルや文化的な慣習(Hale et al, 2009)などの一連の要因によって影響を受けている可能性がある。同様に、母親のウェル・ビーイングや育児効力感もまた、子どもの睡眠障害によって悪影響を受けることもある(Giallo, Rose, & Vittorino, 2011)。

座位行動に関しては、子どもたちは毎日平均140分をデジタルメディア活用に費やしており、その半分の時間をテレビ/DVDの視聴に費やしている。この点においても、政府のガイドラインに準拠していないことが確認された。身体活動に関しては、平均約47分を放課後の

屋外での自由な遊びに費やし、平均約 128 分を屋内での自由な遊びに費やしている。従って、子どもたちは政府のガイドラインで推奨されている1日当たり 180 分の身体活動を行っていないことが明らかになった。一方、Chen らの研究によると (Chen et al., 2019)、子どもたちの 1 日当たりの座位行動の時間は平均 101.9 分 (本調査の結果よりも短い)、適度／激しい身体活動の時間は一日当たり 67.3 分であった。本調査の結果と彼らの結果との間に差異があるのは、シンガポール全土で新型コロナ接触者の追跡や感染封じ込めなどによる行動制限政策が実施され、幼稚園や公共施設が断続的に閉鎖された状況であったことも関係していると思われる。

母親たちの半数以上は子どもが屋外で自由に遊ぶ時間が減り、屋内で遊んだりデジタルメディアを使用したりする時間が増えたと答えているが、これはコロナ禍の状況を考えると驚くべき結果ではないだろう。子どもたちはスマートフォンやタブレットよりもテレビ/DVD を頻繁に使用しており、主に音楽を聴いたり絵を描いたりすることが目的となっている。ただし、大半の母親は子どものデジタルメディア活用にかかわり、内容について子どもと話し合い、難しいことに取り組めるよう手助けをしている。Chen らの定性的研究 (Chen, Teo & Ngyuen, 2019) によると、5 歳以下の子どもの親たちは子どもの勉強、遊び、子守りの補助ツールとして意図的かつ頻繁にデジタルメディアを使用しており、子どもや親自身の認知的、情緒的ニーズを満足させ、緊張感を軽減するものとなっている。彼らの研究結果は、子どものデジタルメディア活用時の母親のかかわりに関する本調査の結果とも合致している。

家族とのかかわりに関しては、本調査の結果、母親たちの大半が子どもの一番の遊び相手として「母親自身」、2 番目として「兄弟姉妹」と答えていることから、親密で健全な家族関係が伺われる。また、子どもたちは概ね保育園／幼稚園の生活を楽しんでいることもわかった。この結果は、家庭環境を問わずポジティブな親子関係が子どもの学校生活への適応に影響を及ぼす予測因子となっていることを論じるいくつかの先行研究 (例: Pianta & Walsh, 1996, Pianta, Nimetz, & Bennett, 1997) とも合致する。

## 本研究の結論と限界

本研究の主な限界点として、非確率標本抽出法による小規模なサンプルを対象として分析を行ったこと、自己選択バイアスや無回答の問題が存在することが挙げられる。しかし、探

索的調査としての本調査の結果は、シンガポールにおける感染拡大という危機的な状況下にある母親たちとその5歳児たちがどのように逆境を乗り越えているかを把握し、インサイトを得るための有用なデータとなっている。すなわち、調査対象の母親たちの大半がパンデミックによって深刻な悪影響を受けていないこと、子どもたちは家族との良好な関係を構築しており、概ね家庭や園生活を楽しんでいることが明らかになった。ただし、コロナ禍において子どもの身体活動の時間が著しく減り、デジタルメディア活用が増えたことは、一部の母親を驚かせる結果ともなった。今後は、子どものハピネスとレジリエンスに関連する要因をさらに詳しく調査することが求められる。

## 謝辞

本研究においてデータ分析とグラフ作成に協力していただいた Alexander Tan Yan Feng 氏(応用研究センター:SUSS)に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- Bell, B. G., & Belsky, J. (2008). Parents, parenting, and children's sleep problems: Exploring reciprocal effects. (「親、子育て、子どもの睡眠障害: 交互作用効果を探る」) *British Journal of Developmental Psychology*, 26(4), 579–593.  
doi:10.1348/026151008X285651
- Bernard, J. Y., Padmapriya, N., Chen, B., Cai, S., Tan, K. H., Yap, F., & Müller-Riemenschneider, F. (2017). Predictors of screen viewing time in young Singaporean children: the GUSTO cohort. (「シンガポールの子どもたちによるスクリーン視聴時間の予測因子: GUSTO コホート調査」) *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 14(1), 1-10.
- Bullinger, M., Mackensen, S., Kirchberger, I. (1994): KINDL - ein Fragebogen zur gesundheitsbezogenen Lebensqualität von Kindern. *Zeitschrift für Gesundheitspsychologie* 2 (64-67).
- Chen, B., Bernard, J.Y., Padmapriya, N. et al. Socio-demographic and maternal predictors of adherence to 24-hour movement guidelines in Singaporean children. (「シンガポールの子どものための24時間行動ガイドラインに関する社会人口学のおよび母親の遵守予測因子」) *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 16, 70 (2019). <https://doi.org/10.1186/s12966-019-0834-1>

- Chen, W., Teo, M. H., & Nguyen, D. (2019). Singapore parents' use of digital devices with young children: Motivations and uses. (「シンガポールの親たちが子どもと一緒にデジタル機器を使用する場合: 動機と使用状況」) *The Asia-Pacific Education Researcher*, 28(3), 239–250. <https://doi.org/10.1007/s40299-019-00432-w>
- シンガポール小児科学小児保健学会 (CPCHS) & シンガポール医学アカデミー (AMS) (2022). Singapore integrated 24-hour Activity guidelines for early childhood (<7years). (「シンガポールの幼児(7歳未満)のための24時間行動ガイドライン」) Singapore. Retrieved <https://www.ams.edu.sg/colleges/CPCHS/publications>
- シンガポール統計局. (2021a). *Understanding age specific fertility rate and total fertility rate*. (「年齢別出生率と全体的な出生率を理解する」) <https://www.singstat.gov.sg/modules/infographics/total-fertility-rate>
- シンガポール統計局. (2021b). Singapore Census of Population 2020, Statistical Release 1: Demographic Characteristics, Education, Language and Religion. (「シンガポール2020年人口調査の統計データ1: 人口学的特性、教育、言語、および宗教」) Retrieved from <https://www.singstat.gov.sg/publications/reference/cop2020/cop2020-sr1>
- Giallo, R., Rose, N., & Vittorino, R. (2011). Fatigue, wellbeing and parenting in mothers of infants and toddlers with sleep problems. (「睡眠障害を抱える乳幼児の母親たちの疲労、ウェルビーイング、および子育て」) *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 29(3), 236-249, DOI: 10.1080/02646838.2011.593030
- Hale, L., Berger, L. M., LeBourgeois, M. K., & Brooks-Gunn, J. (2009). Social and demographic predictors of preschoolers' bedtime routines. (「未就学児の睡眠習慣に関する社会的および人口学的予測因子」) *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*, 30(5), 394–402. doi:10.1097/DBP.0b013e3181ba0e64
- シンガポール人材開発省. (2022). *Labour Market Advance Release 2021*. (「労働市場に関する2021年先行調査」) Singapore. Retrieved from <https://www.mom.gov.sg/newsroom/press-releases/2022/0128-labour-market-advance-release-2021>
- Pianta, R.C., & Walsh, D. (1996). *High-risk children in the schools: Creating sustaining relationships* (「高リスクの就学児童: 継続的な関係の構築」). New York: Routledge.
- Pianta, R. C., Nimetz, S. L., & Bennett, E. (1997). Mother-child relationships, teacher-child relationships, and school outcomes in preschool and kindergarten. (「母と子どもの関係、教師と子どもの関係、および幼稚園/保育園における教育結果」) *Early childhood research quarterly*, 12(3), 263-280.
- レジリエンス研究所. (2018). CYRM and ARM user manual. (「CYRM/ARM ユーザーマニュアル」) Halifax, NS: Resilience Research Centre, Dalhousie University. Retrieved from <http://www.resilienceresearch.org/>